融合研究の主なコラボレーション活動

令和４年度　全領域合同研究交流会

春光天地に満ちる季節となり、より一層ご清祥のことと存じます。全領域合同研究交流会（以下、交流会）では、学際科学フロンティア研究所の先生方と学際高等研究教育院の大学院生（以下、研究教育院生）が、研究発表を通して各々の所属や分野の垣根を越えた議論を行っております。平成26年度に始まった交流会ですが、令和2年度よりオンライン開催へ移行し、昨年度で9年目を迎える運びとなりました。本稿では、交流会運営委員としての視点も踏まえつつ、令和4年度の交流会に関してご報告させていただきます。

1. 交流会開催について

昨年度の交流会は前期に3回、後期に5回の開催を達成し、また、後期第3回交流会では対面形式での交流会（ハイブリッド開催）を3年ぶりに実現させることができました。オンライン形式の交流会では前年度に引き続き「Zoom」を利用し、こちらに関しても概ね滞りなく進められました。発表件数の構成は、1回の交流会につき口頭発表を3件、ポスター発表を10件程度といたしました。発表者は研究教育院生が中心ではありますが、ポスター発表として3件程度、学際科学フロンティア研究所の先生方にもご発表いただきました。

2. 口頭発表について

質疑応答を含め、例年通り20分間の発表時間といたしました。発表者の方には専門用語の使用を避け、できる限り平易な発表をしていただけるよう、周知を徹底いたしました。加えて、発表スライドの添削も例年通り、當真先生をはじめとする学際科学フロンティア研究所の先生方に御願いし、異分野の聴衆が多く参加する中で盛んな議論を展開していただくことを目標としました。ご協力くださいました先生方にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

発表時間外の質疑応答に関しては、アフターフォローとして引き続きクラウドサービス「slido」を利用しました。この場に寄せられた質問は、後日発表者に周知し、回答は参加者に共有いたしました。

3. ポスター発表について

前年度に引き続き、Zoomのブレイクアウトルームおよび振り分け機能を利用しました。発表者は質疑応答含め20分間×3回の持ち時間とし、1回目の発表は聴衆をランダムに振り分け、2回目以降の発表は聴衆が部屋を自由に移動できる環境となっておりました。この方式によって、普段は積極的に聴講しないような演題を含め、幅広い分野の研究内容を聴く機会が設けられたと考えております。発表形式に関しては、ポスター発表という名目ながら、例年通り複数枚にわたる発表スライドで進めていただきました。

4. 現状の問題点と今後の交流会について

既に多くの皆様が「オンライン世代」としてオンラインツールを活用していることと存じます。交流会においても使用方法に関するトラブルは見受けられませんでした。しかし、ポスター発表のブレイクアウトルームにはタイムキーパーがおらず、全体に流れる終了アナウンスが分かりにくい印象を受けました。実際に、前の発表が長引いて次の時間にずれ込む、終了時間前に発表者が終了してしまう、といったケースもありました。さらに、同じ内容を3回発表することになるので、労力・フィードバックともに口頭発表より多い、というのが現状の問題であると考えます。

さて、昨年度より学会等も再び対面開催へ移行していることから、対面とオンラインの長所・短所は皆様ご理解のことと存じます。交流会におきましても試験的にハイブリッド開催を実施いたしましたが、事後アンケートによると「臨場感があり活発な議論につながった」というポジティブな意見が多く伺えました。一方、対面でポスター発表を3回まわすためには、余裕をもった時間配分へ調整する必要が感じられました。これは、議論が白熱するとオンライン以上に発表が長引きやすいこと、聴衆の入れ替わりがスムーズにいかないこと等が要因です。また、参加人数も比較的少数であったことから、今後の開催形式を対面とする場合、積極的な学際交流を促す必要があると考えられます。

末筆ながら、今年度で発足後10年という節目を迎える交流会の更なる発展をお祈りするとともに、昨年度の運営にご尽力いただいた諸先生方、運営委員ならびに参加者の皆様に心より御礼申し上げます。

学際高等研究教育院 博士研究教育院生
令和４年度 交流会運営委員
生命・環境領域 農学研究科　佐々木 貴熙